

神の慰めを告げる牧会的説教を  
——現代人の霊的ニーズに応えるために——

堀 肇

はじめに

牧師となって40年を超えたが、殆ど休むことなく毎週、礼拝説教をしてきたから、その数は単純に計算しても2000回以上にはなる。聖書研究・祈祷会など加えるとその数は6000回を超える。その他に神学校や大学の授業、また講演などを加えると、人前で話をしてきた数は相当になる。若い頃は、こんなにも話をする人生を送ることになるとは想像できなかった。

そのような職務の中で、説教は講義・講演と異なる固有の難しさがあり、果たして人の魂を神のリアリティ・いのちに触れさせることが出来たのかどうかという、自分では確かめることができない説教後の得も言われぬ不全感・無力感に今なお耐えなくてはならない生活を送っている。

その大変な生活を若い頃から予感していたのであろうか。説教は一生の奉仕だから、とにかく学ばなくてはと思い、説教学・説教集などはよく読んできたし、いまだに45分の完全原稿を書き、説教後は録音テープを聞き直し、果たしてこれで良かったのかと、些か客観性を欠いた説教批評（説教診断）の時を持つようにしている。時々、日曜日の夜、皆が帰った後、独り会堂の会衆席に座って、説教台にセットした録音テープを聞くことがある。

こうした未だ課題の多い“説教生活”の中、今年（2011年）、日本福音主義神学会全国研究会議において講演の機会をいただいたことは、生涯の仕事であ

る説教についてももう一度振り返る良い機会となった。また何よりも本研究会議の主題でもある説教の普遍的かつ今日的な課題であるコミュニケーションとトランスフォーメーションを実現していくための良い挑戦となったことを感謝したい。筆者に与えられたテーマは、「何を、誰に、どのように語るのか」の内の「何を」という説教内容に関する部分であるが、この課題について以下の論点から考察をしたい。

### 1. 「神の言葉」を語る前提—説教のための黙想—

説教において「何を語るのか」と問われたならば、それは「良きおとずれ」としての「神の言葉」を語るということである。福音を語るのである。これは余りに自明なことであるだけに、その命題を受け取る説教者自身が、それを語る困難性に気がつかないことがあるのではないかと思うほどである。

「神の言葉」を「人間の言葉」を通して語るということであるから、その本質から言って恐ろしく困難な務めなのである。困難というより罪人であり無力な人間である者が果たして「神の言葉」を語れるのだろうか、と問わざるを得ない事柄、それが説教というものである。

カール・バルトやエミール・ブルナーなど、現代の著名な神学者たちの間において、この神の言葉と人間の言葉との関係を巡って説教の神学に、いや神学そのものに対立があったのは周知のことである。

加えて説教は、単に聖書テキストの釈義や聖書の物語を語るのではなく、その説き明かしを通して、会衆がキリストの現存・いのちに触れるという体験にまで導かなくてはならないという目的があるということ、そこに説教固有の難しさがある。この、言わば福音のリアリティこそが説教の究極的な課題と言ってよいであろう。

そこで必然的に出て来る大きな課題は、説教者自ら神の言葉を通してキリストに出会い、その言葉にしっかり耳を傾けなくてはならないということである。そのためには説教者は、あらゆる準備に先だって、説教のための「祈りと黙想」の時を持つことが必要となる。これは神の言葉を人の心と魂の奥に届けるため

の前提条件と言ってよいであろう。これは説教の成否を決定するほどのものと言って決して過言ではない。

周知のように黙想の歴史は古いものであるが、近年はキリスト教霊性の回復・涵養のために多くの人たちが注目しており、黙想の形式こそ異なれ、ある種のムーヴメントともなっている。ただその種の黙想は、以下に述べる説教準備のための黙想とは目的や方法において当然異なっていると言ってもよい。

とはいえ、説教者なら誰もが何らかの形で行ってきているものであるから、新しいことではない。しかし、筆者はこれをつとめて丁寧に、意識的に実行することが説教準備には不可欠な条件ではないかと思っている。

この点について筆者が若い頃、納得したテキストの一つは、ディートリヒ・ボンヘッファーの『説教と牧会』であった。読み直して見て、やはり名著であると思った。彼は本書の中で説教の準備作業にはまず祈りが必要であることを述べた後、黙想について次のように記している。

祈りに続くのは黙想 (Meditation) である。この言葉を受け入れなさい。われわれによく知られている聖書の部分が、そのまま教会に対する神の言葉にぴったり適合することにならない場合がしばしばある。黙想とは既知の知恵を集成することではなく、聖書本文を一語一語自分のものにするのである。それはあらかじめ一つの目的を定めることなしに行われる。(ローマ教会では、拘束を受けない自由な黙想を、拘束的な、ある目標において黙想するイグナティウスの黙想と区別して独在論的と呼んでいる)。

マリヤが心にとめて思いめぐらしたように (ルカ 2:19)、[聖書] の言葉を心にとめることが肝要である。言葉は、それが全く新しいものとしてわれわれのところに来る時のように読まれることを求めている。言葉を客観的に距離をおいてではなく、イエスの人格からわれわれにむかって呼びかけたり、したがってわれわれの心の中で燃え立つ言葉としてわれわれにひびいて来るのである。(キェルケゴールは、聖書を愛の手紙のように読みなさいと言っている)。

正しく黙想する場合には、その黙想された言葉は、その日の中にひとり  
でくり返し思い出され、論理的に意識された思索作業なしにわれわれに  
伴って行くのである<sup>1</sup>。

説教のための黙想とは、ボンヘッファーが述べているように「聖書本文を一  
語一語自分のものにする事」、「それが全く新しいものとしてわれわれのとこ  
ろに来る時のように読まれること」なのである。黙想については、もう少し詳  
しい説明が必要なのであるが、本稿ではE・H・ピーターソンが『牧会者の神学』  
で言及している黙想に関する叙述を参考として記すに止めたい。彼は聖書  
テキストの研究において、解釈学的な注意を十分に払う必要を説いた上で、こ  
う記している。

牧師にとって聖書解釈の課題とは、神の言葉を生きたものするために奉  
仕することである。解釈学というものが教会の生命であるものに奉仕し、  
牧師の召命にふさわしい役割を果たすものであろうとするなら、それは  
「黙想の解釈学 contemplative exegesis」でなければならないのである。……  
黙想による解釈では、言葉を「音」として聞こうとする。言葉は私たちの内  
なる部分から現れてくる<sup>2</sup>。

さて、福音を告知する説教には前提条件があることを述べた。それは前述した  
ように、聖書の言葉を「全く新しいものとしてわれわれのところに來る時のよ  
うに読まれること」であり、「音」として聞かれることである。そのためには、  
説教で語られるメッセージが、単に知・情・意の意識レベルではなく、つまり  
魂（霊）の内奥において自分のものとなるためには、聖書テキストを時間をか  
けて黙想することが必要であると申し上げたい。客観的な真理が、聞き手の実  
存を揺さぶるほどのものとなるためには、この黙想が必要不可欠なのである。

<sup>1</sup> ディートリヒ・ボンヘッファー著、森野善右衛門訳『説教と牧会』新教出版社、44  
-45頁

<sup>2</sup> E・H・ピーターソン著、越川弘英訳『牧会者の神学』日本基督教団出版局、140、  
150頁

これはどれほど強調してもし過ぎることはないかと筆者は考えている。

## 2. 説教の源泉—復活の説教

前述したように、説教者は聖書に記された「神の言葉」を「良きおとずれ」  
として語るのであるが、常に確認しておきたいことは、イエスから宣教の委託  
を受けた弟子たちの、つまり原始キリスト教会の語った基本的なメッセージが  
「ほんとうに主はよみがえって……」（ルカ 24：34）というイエスの復活の告  
知であったということである。私どもの説教の源泉はここにあり、ここから出  
て、ここに帰るべきなのである。従ってキリスト教の説教において、本稿の主  
題のように「何を語るのか」と問われたならば、単純に言えば、それはいわゆ  
るキリスト教神学の体系や道德律を語るのではなく、イエスの復活の証言と言っ  
てよいであろう。もちろん、それは敢えて言うまでもなく、キリスト教神学や  
キリスト教倫理学の体系を軽視することではない。

ところで、この復活の事実を告知するということは、主の日の礼拝において  
毎週、復活物語をテキストに「主はよみがえって」と機械的に繰り返し語れば  
よいということではなく、説教の中心点・土台がそこにあるということなので  
ある。正しく言えば、聖書テキストのどのような箇所から語られようと、説教  
者はイエスの十字架と復活に現わされた神の無条件の救いの福音に立脚して語  
るということなのである。それは復活信仰に生かされて語る、と言い換えてよ  
いであろう。

ただ説教者は、この説教における「復活の中心性」について、もう少し明快  
な理解をしておきたいという思いがあるのではないだろうか。言わんとするこ  
とは分かる。しかし何か実践的な示唆がほしいと誰もが思う。この点について、  
トマス・G・ロング（プリンストン神学校）が『現代神学思想事典』（アリス  
ター・マクグラス編集）の中に記している説明は理解しやすい。彼はキリスト教  
の中心真理である復活は、二つの方向に向かうと指摘している。それは聖書の  
物語全体を語る方向と、その物語を聴衆の現在に合わせる方向があるという。  
下記の通りである。